宇治十帖研究序説

―大君の人物像をどう把握するか―

武原弘

一

源氏物語全篇にあって、宇治の物語の十帖は、それ自体で統一性のある独自の世界を形成していると考えられる。いわゆる〝宇治十帖〟の呼称によって、このことは端的に示されているが、この宇治十帖の世界とはいったい如何なるものか、宇治十帖の内部世界の統一性とは如何なる本質をもっているのか。この問題は、いわゆる正篇との関連性の問題にも当然及んできて、大小さまざまの研究課題を提起してくる。この十帖が、大別して前半の五帖（〝橋姫物語〟）と、後半の五帖（〝浮舟物語〟）に分けられ、それぞれが独自の統一世界を構成しつつ相互に統一体を成しているため、問題はさらに複雑化する。高橋和夫氏は、この二つの物語が、それぞれに、構想面において相互に〝統一性〟をもたないと説いておられるが、[註1] 例えば、主要人物大君と浮舟とを見ても、二人の人物は単に羅列的にそこに続いているというものではなく、それぞれ相異なる独自の世界を担う二大個性であると同時に、両者はまた一つの物語世界を担うものとして受けとられるべきであろう。[註2] この問題については森岡常夫氏のご論考があり示唆深い。[註3] 氏は宇治十帖の世界の内部統一性を肯定的に把握しようとしておられ、また別の論文でも、従来の宇治十帖研究がしばしば浮舟事件に重点を置き、大君の世界を過小評価してきたことについて、その不当性を鋭く指摘しておられる。

宇治十帖の世界をどう把握するかは、源氏物語全体の主題をどう受けとるかという問題にも関わる、重要な問題である。私はいまこのような問題を視野におきながら、宇治の大君の人物像に焦点をあわせて考察を進めたい。

二

宇治の大君の人物像については、すでに先学の研究が多い。私は、その成果に学びつつ、作品内部の叙述細部に即して、先ず大君の人物像を再確認しておきたいと思う。

大君の物語を、一言に、薫の求婚に対する大君の徹底的な拒否の物語、と要約することができる。そして、物語構成の中で主題を展開する主要な契機（モチーフ）は、大君の結婚拒否の理由である。

大君は薫の愛を拒否し、死ぬ。その理由はいろいろ考えられるが、私はこれを次の三点に要約して考察したい。すなわち、第一には、妹中君に対する大君の愛情の故、第二には、故八宮の遺誡の故、第三には、大君の人生観の故である。(註4)

まず、大君が薫の切なる求愛を拒否したのは、薫を妹中君に譲ろうとの、姉らしい思い遣りからであった。薫は、大君の求婚者として理想的な男性であったが、それ故にこそ、薫と中君の結婚を大君は望むのである。

さるは、少し世ごもりたる程にて、深山隠れには、心苦しく見え給ふ人の御うへを『いと、かく、朽木にはなし果てずもがな』と、人知れず、扱はしくおぼえ侍れど、（以下略）

（総角、三八三ペ）（日本古典文学大系（岩波書店）本源氏物語より引用、以下同）

古い侍女たちは、これまでも度々大君に結婚をすすめてきたが、彼女は

たわむべくも物し給はず、中の宮をなん、『いかで、人めかしくも扱ひなしたてまつらん』と、思ひ聞え給ふべかめる。……（中略）……いまは、とざまかうざまに、こまかなるすぢ、きこえ通ひ給ふめるに、『かの御かたを、さやうにおもむけて、きこえ給はゞ』となん、思すべかめる。（総角、三八六ペ）

と聞き流している。薫が強いて迫れば、そのときは「このきみをおし出でん」（総角、三九八ペ）と大君は決心している。弁の君の道理をつくした説得（総角、四〇二～三ペ）にもかかわらず、大君の強い拒否は変わらない。やがて薫は姉妹の寝室に侵入する。大君は気配を察知するや、無心に寝入る中君を残したまま、奥に身を隠す。（無論突差の出来事ではあろうが、細かく読めば、大君のこのときの行動は薫を中君と契らせるための予定の行動であったとも見られる節がある。総角、三九八～九ペ参照）。

大君の中君に対するこのような愛情を考えるばあい、大君の年令や容貌のことも併せて考慮に入れる心要があろう。鏡に映る自分の姿に早衰えの陰影を発見しなくてはならない大君（総角、四二七ペ）に比較し、中君は年も若く、その容貌も匂うばかりの美しさ。女盛りである（総角、三九五、三九七ペ参照）。このように美しい中君が自分のような老嬢と共に月日を過ごし、あたら青春を浪費するのを見るには堪えられない大君であった。まして両親のない境遇であってみれば、親代わりになって妹をかしづき愛くしむことは、大君の責任でもあった。大君が特に父や妹などの肉親に対して情愛の豊かな性格であったことについて、彼女の生い立ちや家庭環境などその責任重い立場を考慮しなくてはならないことは、森岡氏や篠原昭二氏のご指摘のとおりである。(註5)

結果的には、中君は図らずも匂宮と契るはめになってしまった。大君の「本意」は実現されなかったが、妹の結婚を祝って三日夜の餅の儀式をさしずしたり、また、その後、夫の薄情冷遇を悲しむ中君の身の上をわが身のことに思い煩う大君の姿には、妹に対する大君の深い愛情が見てとれるのである。薫の求婚を執拗に拒否しなければならなかった大君の心境には、この中君への犠牲的肉親愛が大きな位置を占めていたと思われる所以である。

次に、大君の結婚拒否の理由として故八宮の遺誡があった。その

遺誡とは、

おぼろげのよすがならで、人の言にうち靡き、この山里をあくがれ給ふな。たゞ、『かう、人に違ひたる、契り、異なる身』とおぼして、『こゝに、世を盡くしてむ』と、思ひとり給へ。ひたぶるに思ひなせば、ことにもあらず過ぎぬる年月なりけり。まして、をむなは、さるかたに絶え籠りて、いちじるく、いとほしげなる、よそのもどきを負はざらなむ、よかるべき。（椎本、三五〇ぺ）

である。自分の死後、天涯孤独の身を世にさらす娘二人のことを思えば、俗聖八宮は仏道修業に専念してもおれない心境であった。女の運命（さだめ）とは結婚である。しかも真に幸福な結婚は世に稀であり、多くは女の歎きと涙に満たされる不幸がその運命（さだめ）であることを、仏道は教える。八宮はまた、仏道を志す直接の動機を自己の過去の生涯に忌まわしい体験として持ってもいた。[註6] それ故に、娘に軽卒な結婚を強く戒めるその口調は強い説得力をもっていたであろう。

八宮は、姫達の侍女にも

生まれたる家の程、おきてのまゝに、もてなしたらむなん、聞き耳にも、我が心地にも、あやまちなくはおぼゆべき。『にぎはゝしく、人数めかむ』と思ふとも、その心にも、かなふまじき世とならば、ゆめ〳〵、軽〳〵しく、よからぬ方にもてなし聞ゆな。（椎本、三五二ぺ）

と訓戒している。

八宮のこの遺誡は、「家名を汚すな」というきわめて現実的具体性を伴い、大君にとって殆ど絶対的な、権威ある戒律となった。薫の求愛を拒む大君がまず楯としてしばしば用いるのがこの遺誡であったことを見れば、このことは明瞭である（総角、三八三、三九二、四〇二ぺ参照）。

昔のおもむけも、『世の中を、かく、心細くて過ぐし果つとも、中〳〵、人笑へに、かろ〴〵しき心つかふな』など、のたまひおきしを。おはせし世の御ほだしにて、おこなひの御心を乱りし罪だに、いみじかりけむを、『今は』とて、さばかりの給ひし一言をだに、たがへじと、思ひ侍れば（以下略）（総角、三九九ぺ）

大君が薫との結婚を中君にすすめる詞の一節だが、自分の結婚拒否の根拠を故宮の遺誡においていることがここにも明白である。好色で評判高い匂宮の中君への薄情な態度を見知り、さらに匂宮と六君との結婚の噂を聞くに及んでは、父のこの遺誡は大君の身に痛く響いたに違いなかった。匂宮の冷遇に、

これこそは、返す〴〵、『さる心地して、世を過ぐせ』と、のたまひおきしは、『かかることもやあらん』の諫めなりけり。（総角、四四〇ぺ）

と、大君は嘆くが、この文末の「なりけり」には、大君の深い悲嘆がこめられていることを知るべきである。「故宮の御誡めにさへ違ひぬること」（総角、四六七ぺ）ばかりが、重苦しい痛恨となってたえず大君の念頭を去らなかった。

野村精一氏も説かれる如く、[註7] 父八宮の遺誡に対する大君の態度には、明らかに錯誤ないし矛盾がある。八宮の訓誡は、薫一人のみを例外としていた命題であったからである。氏のご指摘のとおり、大

君における「この例外規定の捨象は、薫にとってはその意味が大きい」のである。にもかかわらず、大君には何らの煩悶躊躇もなくその例外規定が捨象された。ここには、大君の結婚拒否をめぐる思量の抽象性観念性が端的に表われているのであるが、この点については後述したい。

ともあれ、八宮のこの遺誡は大君の結婚観に決定的な拘束力をもっていた。われわれは源氏物語正篇において、予言が運命的な拘束力を持っていたことを知っているが、[註8]そういう古代物語型式からさらに発展した物語手法をとるこの宇治十帖においても、それと類似のものを見とめることができる。

薫拒否に徹する大君の理由として、第三に彼女の人生観そのものに注目すべきである。

大君は、早くから「男女の契り」（「宿世」）に対して懐疑的であった。匂宮から文通のあり初めた頃、返事を促す父に従うのは中君であった。大君は「かやうのこと、たはぶれにも、もて離れ給へる、御心深さなり」（椎本、三四四ペ）と、関知しない。右の「かやうのこと」とは男女の交際の意である。その意味では大君は常人らしくない。「世に人めきて、あらまほしき身ならば、かゝる御ことをも、何かはもて離れても思はまし。されど、昔より、思ひ離れそめたる心にて、いと苦し」（総角、四〇一ペ）と、かたくなに愛を拒む大君を、薫は、

いかなれば、いと、かくしも、世を思ひ離れ給ふらん。聖だち給へりしあたりにて、常なき物に、思ひ知り給へるにや。（総角、四〇三ペ）

と思量する。「世」とは、世の中、世間の意であり、男女の仲、夫婦関係をも意味する。大君の人生観に触れた叙述である。中君の結婚に不幸が影さしはじめたのを見るや、大君は「いとど、かかるかたを、憂き物に思ひ果てゝ、『猶、ひたぶるに、いかで、かくうち解けじ。あはれと思ふ人の御心も、かならずつらしと、思ひぬべきわざにこそあめれ』」（総角、四三二ペ）と思念するのであるが、ここに及んで大君の薫拒否は、単に薫のみならず、男性一般の拒否であり、世界観としての「世」捨てであり、人生観としての結婚そのものの拒否というべきである。事実、薫と大君の交際は、その当初においては道心を語る交友であった。「定めなき世の物語」「世の中の思ふことの、あはれにも、をかしくも、その時につけたる有様」を語り合う同志であった。「常なき世の御物語に」応答する大君の様子は落ちついて上品な感じであったと叙してある（総角、三九二ペ）。客観的な状況描写であるが、そこには大君の人生観が端的に描写されていた。

このように、大君の薫拒否は、そのまま「宿世」の否定であり、「世」そのものの否定であり、結婚の否定であった（総角、四四一ペ）。世の否定は究極的には死か宗教かのいずれかを帰結点とする。重態に陥ったとき大君は、

猶、かかるついでに、いかで亡せなむ。—（中略）—もし、命、しひてとまらば、病にことつけて、かたち変へてん（総角、四五九ペ）

と念じているが、この思念の根源は深かったといわなくてはならない。すなわち、現世無常の仏教的人生観がその根底にあったのであ

る。これは、大君の薫求愛拒否の心情が思想なり人生観にまで発展したと見るべきではなく、正確には、そのような思想性抽象性の広がりの中でのみ大君の薫拒否ということがはじめを生起し得たと見るべきであろう。

三

このような結婚拒否を基調として大君の人物像は造型されたのであるが、それはこの物語世界においていかなる典型であったのか。前述の結婚拒否の理由そのものの中にそれは探求されるはずである。

注意深く読むとすぐわかることだが、大君の薫との結婚拒否はいくつかの錯誤ないし矛盾や飛躍を含んでいる。野村氏のご指摘のとおり(前述)、故八宮の遺誡(前掲)には唯一の例外規定があったはずで、八宮は生前自分の死後の娘たちの後見を薫にくれぐれも依頼し内心密かに結婚をも望んでいた(椎本、三四六～八ページ参照)。大君自身そのことは知っていた。[註9] ここで注意すべきことは、父八宮の訓戒は特に大君にだけ垂れられたのではなかったし、八宮が薫との結婚を望んだのも、必ずしも大君にと限っていなかった。にもかかわらず大君は父の訓戒を自分一人にのみ掟て、しかもその訓戒にある唯一の例外規定を捨象してしまったところにこそ自己の生き方を確立したのである。これは大君自身の論理を全うするための意図的な曲解であり、断裁である。大君が父の遺誡を振りかざして自分の結婚を否定し中君に薫との結結をすすめるとき、中君は

一所をのみやは、『さて、世に果て給へ』とは、きこえ給ひけん。はかばかしくもあらぬ、身の後めたさは、数添ひたるやうにこそ、思されためりしか。(総角、三九九ページ)

と答えているが、大君の思量の矛盾・飛躍をいみじくも指摘した言辞というべきである。

また例えば、薫を中君にとの心遣いも、確かに姉としての妹に対する愛情とみることが否み難いところだが、その心境についても疑点が残る。二人の寝室に薫が侵入したときの大君の態度や心境(総角四〇四ページ、前出)など、あれは要するに薫からの逃避保身にすぎないとの見方も可能である。[註10] 中君故に許されないのならばと、匂宮を中君に会わせておいて大君に迫る薫だったが、その時の大君の態度(総角、四一六ページ)にも、薫からの求婚を避けること自体が先走っているとの感を免れ得ない。

また、匂宮と中君夫婦の例から、結婚を信ぜず(総角、四四〇ページ)、「宿世」を否定する大君の態度には、著しく抽象的な観念だけを追求している人物像が見えている。大君の論理は自己の生々しい直接体験に基づいたものでなかったし、薫と匂宮とを男性一般の抽象において性急に同一視することは、作者が匂宮の巻以来精叙した二人の性格の相異は何であったのか、との問いを必然的に生ぜしめる。一事の特例から一般を律するところに、抽象的な観念に理窟しやすい大君像の本領がある。

大君造型におけるこのような錯誤や飛躍は、勿論、マイナスに機能するものではない。むしろ、大君が宗教的人間像を明確に獲得するための必須不可欠の条件であったと私は解したい。それは、紫式

部の宗教志向の頂点に造形され、同時に、宗教批判の偽らざる表明であったのである。

ともあれ、大君の人物像とは「人間否定を観念的に固執して、結婚拒否という抽象性に生きる人間」[註11]であることが肯かれる。しかも、彼女の思惟方法は常に現実から自己を逃避させ、固定化させるという、閉鎖的自律的な方法であった。彼女は現実における人間の愛が信じられなかった。故にまた、永遠不変なる愛を慕う気持も強かった（総角、四五九ぺ）。大君は徹底的に宗教的な人物であったのである。

また、このような大君像の造型の営為が、作者紫式部自身の結婚観の直接の投影であり、源氏物語正篇の諸人物の生の極点にあるものの探求であることは、紫式部日記を見ても明らかであり、諸氏の指摘にあるところである。[註12]また、ここに、作者の平安貴族文化の欺瞞に対する痛烈な批判がこめられていたことも確かである。[註13]

ところで石田穣二氏は従来の大君論に不満を示され、「多くは、その拒否（注、大君の薫求婚拒否）の理由を精細に数え立てる。物語中の人物の結婚問題を、あたかも現実の我々のそれの如く考量してみて何になろう。大い君の思量の妥当、不妥当を言ってみてもそれが何になろう。（中略）大い君の死の原因をあげつらってみても、その結婚拒否の理由を数え立ててみても、決してそれは物語の核心に触れない。（中略）我々にとって大切なのは大い君の死を納得することなのである。（中略）作者は読者を納得させすべくつとめているのが真相なのである」[註14]と述べておられるが、この提言は示唆深い。だが、その結婚拒否の理由を数え立てるだけではどうにもならないほどの完璧さ正確さ豊かさの裡にこそ、大君の人物像の全体があり、その意味で大君結婚拒否の思量のいちいちは「物語の核心」として完結した目的体なのではないか。問題はむしろ、そのような大君をこの宇治十帖の世界にどう位置づけるか、である。さらに限定して、宇治十帖前半の橋姫物語の世界における大君像の位置づけである。主題論の側からアプローチする場合なら、大君の宗教性に盛ろうとした作者の人間観の問題になるであろう。

四

論点が少し変わるのだが、宇治十帖の物語構成の方法としてきわめて特徴的なものは、清水好子氏のご指摘にもある「二者対照」の方法である。[註15]大君と中君、薫と匂宮などの人物の対照はもとより、理念思想の面における地上的なものと非地上的なもの、好色と求道、霊と肉などの対照法が著しい。「妹によって鮮明になる姉、匂宮によって照らし出される薫、この対応する二つの対照は姉と薫とが相呼ぶ人物とされることによって、おのずから妹と匂宮の結びつきをもたらし、ここに二重に対照的な二組の恋人をつくる。宇治十帖はこの緊密な二者対照の均衡への高まりと、大君の死後この均衡が破れ対照的な二人の男が対照的な姉妹二人ながら繋がる一人の浮舟に集中するところに生じる破局を持った均整のとれた形式である」と清水氏は述べておられる。妥当など指摘である。ただ私は、このような対照法だけでは解明されないものがなお残るのではないかと考える。例えば、その対照において、大君の人物像の深長さに比較して

中君のそれがあまりに軽小でありすぎはしないかという素朴な疑問から、さらに、先の二組の対照的な恋人の一人大君の死がもたらす均衡の破れが、薫と匂宮と中君の三角関係という構図にではなく、大君の形代浮舟という新しい女性を登場させる構図に展図する事実をどう理解するかという疑問まで、いくつかの問題が私に投げかけられてくる。

大君と中君とは確かに対照の方法の中に造型されている。姉妹の性格の相異なども早くから描かれており、

ひめ君は、心ばせ静かに、よしある方にて、見る目・もてなしも、気高く、心にくきさまぞし給へる（橋姫、二九九ぺ）

とか、

ひめ君は、ららうじく、深く、おもりかに見え給ふ。わか君は、おほどかに、らうたげなるさまして、物づゝみしたるけはひ、いと、うつくしう、さま〳〵におはす。（橋姫、三〇一ぺ）

などの叙述が見られる。やがて薫の求婚をめぐって二人の性格のちがいは正に対照的に浮き彫りされてくる。大君は思慮深く理想的非地上的であり、中君は現実的で地上的現在的である。しかし、概して中君の人物像は曖昧であり、殊に心理描写が少ない。作者は明らかに大君の方に比重を置き、敢えて言えば、大君を自画像として描いている。総角の巻では、中君は単に大君の人物像を造型するための一手段との感がある。それでいて中君は、当時の貴族社会にはそれほど異和感を感じさせない、現実的で具体的な人物像を確保しているのである。作者は対照的に大君の反措定としての中君像を意図していたにちがいない。しかし、中君の人物像は必ずしも作者の意図を満足させるだけ十分形象化されてはいないように私には思われる。

また、大君の死によって破られた二組の対照的恋人の均衡について私は考える。大君の死後、薫と匂宮と中君の三人の関係を物語展開の主要な契機として積極的に構想化しないで、新たな浮舟をもってしたからといって、それが不当だと言うつもりは私に全くない。それこそ作者の自由である。しかし、対照的な男女を通して展開した二組の恋愛が主たる方法であるとき、その中の一人を欠くことによって残る三人の関係が新たな状況に再設定されることは、きわめて自然な予想である。事実、薫と中君との関係は恋愛に発展し、匂宮と併せて、三角関係にまで緊張状況を招来せしめんとしたことは後続の早蕨の巻、宿木の巻に詳しい。さかのぼってみても、大君の生前において、そのことは確かに伏線をもっていた。薫の大君に対する愛情はその死に至るまで終始一貫して変わることはなかったが、大君の執拗な拒否にあい、妹中君との結婚ばかりを請求されて、薫は中君と契る「宿世」であるかも知れないと思ったこともあったし（総角、四〇五ぺ）、薫が今更妹中君に移り変わらないのは、周囲の人々（特に弁の君）から軽薄だと非難されそうだからなのだと、いかにも小心な俗物根性を見せている叙述もある（総角、四〇九ぺ）。薫はそのとき、大君に「心染めけんだに悔しく」といっている。薫の心情の揺れを読みとるべきである。また、臨終の床で大君が「妹と結婚して下さっていたら私も安心して死ねもされますのに」と言うのに対して、薫は、

いかにも〳〵、ことざまに、この世を思ひかゝづらふ方の侍

らざりつれば、御おもむけに従ひ聞えずなりにし。今なん、くやしく心苦しうもおぼゆる。されども、うしろめたくな思ひ聞え給ひそ。（総角、四六二ペ）

と答えている。この薫の詞はむろん大君に対する慰めである。が、これ以後薫が、たとえ後見という役目をもってにしろ、中君との関係を続けることをここで暗示しているのであり、その関係が恋愛に発展する可能性をもっていることは、読者の容易に察知するところである。ちなみに、総角の巻の末尾には、薫と中君との間柄を早くも邪推する匂宮を描いているのである。

こうして、匂宮夫婦と薫との三角関係という事態は、確かに、その萌芽を認めることができる。しかし、それも、浮舟の登場によって解消され、後半の浮舟物語における全く新しい人物関係へと急転回してしまうのである。ここに、大君の世界と浮舟の世界の関連性の問題が問われてくる。そしてこの二つの世界の関連性ないし統一性の問題は、大君の人物像を究極的にどう把握するかということを鍵としているようである。

藤村潔氏によると、大君の結婚拒否は「作者の観念的苦悩自体の物語的表現」であったから、「大君亡きあとに展開される物語はその本質に於て、大君の世界と何等異なるものではない。薫が中君を失い、更に浮舟をも失ったのは、大君の世界のだめ押しであったといえる」と解され、「宇治の物語は大君の世界から展開して、また大君の世界にかえった」と説いておられる。[註16] また、石田穣二氏は「大い君の死の場面には、高度の完結の響きがある。橋姫以来書き続けられて来た世界の意味が、一挙に明らかになり、一望の下に見渡されるような、そういう不思議な視野を我々にひらく何ものかがある」[註17]と述べておられる。両氏には、問題点として考察されている領域も論点もちがっているので、両説を即座に並記する事は許されないであろうが、いずれも大君の存在を重視しそこに完結した一つの世界を見ておられる点は共通していると思われる。一方、森岡常夫氏は、大君の世界と浮舟の世界とがその本質において相異なって対照的であるとの基本的見解に立たれ、大君の人間像の宗教性を指摘されたあと、「それはいわば中途半端なものであった。人間の愛は、いかに宗教的なものに接近しても、それが一致するはずはない。作者はそのような解決に満足するものではなかった。今一度殻を破らなければならない。浮舟の世界の書かれなければならぬ理由は、ここにあった」[註18]と説いておられる。藤村氏と森岡氏とでは、宇治十帖の世界の解釈に明らかな相異がみられる。私見を述べて本稿の一応の結論としたい。

五

薫と大君の恋は、大君の死において最も宗教的な愛の永遠化が達成され、大君は薫にとって永遠の恋人となり得たのである。この薫と大君の対応関係において注意しなくてはならないことは、本来二人は、互に同質の世界――現世否定の宗教世界に生きる人間であったということだ。薫は幼くして父（光源氏）に死別し、自分の出生の秘密を知りこの世は悲しいものと思い至り、現世的な栄達とか色恋沙汰は全く眼中になかった（椎本、三六三ペ）。「いと、あやし

き本性にて、世の中に、心をしむる方なかりつる」（総角、三八四ページ）のであった。薫の大君への愛が世間並みの好色によるものでないことは、薫自身の口を通して度々説かれたところである。大君の世界も本質的に同じものである。

にもかかわらず二人は最後まで平行関係を保ち、大君の死において極点に達する。二人が相互ふさわしい人間であったのは、最もよく対立する人間だったからであるともいわれるのであるが、[註19] 薫の如き理想的貴公子にもかかわらず、また、大君と同じ宗教的世界に棲息する薫であったにもかかわらず、大君の深い内面生活に対して遂に無縁であったのは何故か。

秋山虔氏も言われるように、物語の進行につれて、作者の人間追求の態度が、はっきりと大君の方に傾き、[註20] それに反比例して、薫像の通俗化が進むことを、私どもも見落とすわけにはいかない。私が先に述べた、大君と中君の対照における中君像の造型不足も、このことと関係があると思う。薫の人生観の根本に仏道欣求の思想があったとしても、その薫に身も心も閉じている大君のかたくなさを難じる侍女たちの言葉は、薫の世界の通俗的側面の代弁であったのである。大君の死後、悲歎にくれる薫が詠んだ歌

恋ひわびて死ぬる薬もゆかしきに雪の山にや
跡をけなまし

に対して、作者は「『なかばなる偈、教へけん鬼もがな。ことつけ投げん』と思すぞ、心ぎたなき聖心なりけり」（総角、四六六ページ）と、薫の道心の乱れを痛烈に皮肉っているが、薫の大君への接近の裏側がここに如実に明かされているともいえよう。「薫の俗物性」（清水氏）はこのことと無縁ではない。

かつて、かたくなに結婚を拒否する大君を訓して侍女たちが言う詞の中に、次のような詞が見られる。

いかなる人か、いと、かくて、世をば過ぐし果て給ふべき。松の葉をすきて勤むる山伏だに、生ける身の、捨て難さによりてこそ、佛の御教へをも、道〳〵に別れては、行ひなすなれ。（総角、三八六ページ）

あながちに、もて離れさせ給うて、おぼしおきつるやうに、おこなひの本意を遂げ給ふとも、さりとて、雲・霞をやは（総角、四〇三ページ）

平安朝貴族社会の常識から仏道の世界を批評した、ありふれた言辞なのだが、この常識と徹底的に対立した大君の世界は、急激に常識の世界に傾きはじめた薫の世界とは、まさに対極をなしていたのである。薫の世界はあまりにも人間的であった。人はそれをしばしばネガティブなものと受けとる。しかし、その宗教的人間像としての大君の完璧さに比べ、薫のこのような人間的に豊かな感情の傾きを、私は薫の弱点とは見たくない。大君の人間像が宗教的かつ非現実的なものであればあるほど、それとは対照的に、薫はいっそう現世的地上的な人物に造型されるのであるが、そういう薫の心の動揺こそが実は宇治十帖の世界の重大なモメントなのである。ここで作者は、宇治十帖の全体に試みようとする主題を薫と大君のいずれにより大きく担わせようとしたのであろうか。作者は宇治十帖において、矛盾と苦悩に満ちた人間現実の救済を宗教の世界に求めていこ

うと試みているということは、疑えないところであろう。かかる人間救済の主題を、作者はまず薫創造の営為を通して追求しはじめた。宇治十帖の発端が、薫が全身にひっさげている人間の原罪への深い内省という状況設定から書きはじめられていることは、あくまでも重要である。だが、薫と大君の邂逅を通して造型される大君を、作者は自己の分身として描いた。大君も宗教的人間である。同じ宗教の世界に生き、同じ主題を担うはずの薫と大君が、ここで相互に対極に立つ対応関係をもつことになる為に、求道者薫から求婚者薫への転落という犠牲が払われた。しかも作者は大君の造型に集中した。作者自身が、女として当時の貴族社会の中に生きぬくときに想念した人間苦の現実を、女性である大君に仮托して追求したことは、きわめて当然である。大君は徹底した宗教的非地上的生を欣求した。しかもその思量の方法はきわめて抽象的観念的であり、かつ自律的自閉的であった。薫との恋は、彼女の死においてこそ完成し、愛の永遠化が全うされた。その意味において彼女は完璧であったが、逆に薫を地上的現世的世界の人間像に転じてしまわなければならなかったのである。

大君とは、その死において生を終焉し、恋を完成した、そういう人物である。しかも、薫の求道心を人間的な情念の次元にまで揺り動かすことをその贖いとしていたのである。この大君の世界で、作者は、人間原罪からの救済という主題を解き明かし果したであろうか。私は否定的である。その理由は、大君の清純で厳粛な当の死にある。その発端において薫に仮托して作者が意図したところの宗教的救済の問題は、大君の創造によって確かにその本体を赤裸にしはしたが、人間苦の解決を死に委ねるところに、なおこの命題は未解決のまま残されたのである。ここに、作者が浮舟物語を展開する必然性がある。岡崎義恵氏や青木生子氏のご見解の如く、宇治の物語では、あくまでも薫が中心であり、大君や浮舟の恋愛もその立場でとらえるべきであろう。

宇治十帖の世界に特徴的であった二者対照の方法にしても、単にその対照による物語世界の緊張や明瞭さのためにのみそれはあったのではない。その二極二律の間に身を置いて激しく苦悶する人間現実そのものを、作者の両眼が執拗に追求していったとき、自らそのような方法がとられたのである。前半では、道心と恋情の間に葛藤する薫、後半では、誠実（薫）と多情（匂宮）の間に身を裂く浮舟の問題こそが宇治十帖の本質を担っているのである。このような揺れや葛藤をもたない大君の生と死は、ありうべき一女性の典型とはなり得ても、人間の現世苦とその救済を追求してやまない作者にとっては、やはり一つの実験でしかなかったのである。そしてその実験は失敗した。現世捨象の宗教では、なお律しつくせないものの多い人間の生なのである。紫式部が内心において切実に仏道を志向しながらも、一方で仏道だけで俄に解決できない人間の生をいかに深く見つめていたかは、彼女の日記がよく示すところである。[註21] 物語は、再び薫の担う生の根源的問題をひきずりながら、さらに浮舟物語へと展開されなければならなかった。

（昭43・9・30）

註

(1) 高橋和夫「源氏物語の主題と構想」(昭41・2、桜楓社)

(2) 橋姫物語執筆中に浮舟物語が構想されなかったとの見解(高橋氏、藤村氏など)を肯定しても、なお作品形象の統一性は追求される。

(3) 森岡常夫「源氏物語の研究」(昭42・11、弘文堂書房) 同 「『宇治十帖』をめぐる諸問題」(解釈と鑑賞、昭36・10)

(4) (3)によると、森岡氏は妹中君に対する愛情と大君の宿世観の二点に要約しておられる。

(5) 森岡(2)、篠原昭二「源氏物語の人間像」(国文学昭43・5)

(6) 橋姫の巻冒頭参照

(7) 野村精一「源氏物語の問題—宇治十帖の人間像(一)—」国語と国文学(昭34・4)

(8) 拙稿「源氏物語の短篇手法について」(「国文学研究」第二号 梅光女学院大学(昭41・11)

(9) 総角の巻(三九四ぺ)に、「故宮も、『さやうなる御心ばへあらば』と折〳〵、の給ひ、思すめかりしかど……」という大君自身の述懐がある。

(10) (5)の篠原氏の論文。

(11) (1)に同じ。

(12) 森岡常夫(3)、田中常正「源氏物語宇治十帖に於ける大君の世界の持つ意義」(国語と国文学、昭28・3)、今井源衛「源氏物語登場人物の性格と役割」(国文学昭34)

(13) 重松信弘「源氏物語の構想と鑑賞」(昭37・2、風間書房)

(14) 石田穣二「総角」の巻解説(国文学、昭41・6)

(15) 清水好子「世をうぢ山のをんなぎみ」(日本古典鑑賞講座、源氏物語、昭32・12、角川書店)

(16) 青木生子「大君の恋愛観」(「古代文芸における愛」弘文堂、昭29・4)も参照。

(17) 藤村潔「源氏物語の構造」(昭41・11、桜楓社)

(18) (14)に同じ。

(19) (3)に同じ。

(20) 秋山虔「源氏物語必携」(昭42・4、学燈社)の「総角」の巻の解説

(21) 秋山虔「源氏物語の世界」(昭39・12、東京大学出版会)

世のいとはしきことは、すべて露ばかり心もとまらずなりにて侍れば、聖にならむに、懈怠すべうも侍らず。ただひたみちにそむきても、雲に乗らぬほどのたゆたふべきやうなむ侍るべかなる。それに、やすらひ侍るなり。(中略)心深き人まねのやうに侍れど、いまはただ、かかるかたのことをぞ思ひ給ふる。それ、罪ふかき人は、またかならずしもかなひ侍らじ。さきの世しらることのみおほう侍れば、よろづにつけてぞ悲しく侍る。(紫式部日記)